

「シャッフル」ロードショウ+1

'80年代を疾走する石井聰互監督の渾身の最新作、遂に完成!

彼と並ぶ若き映画作家たちの作品をゲストに迎えて、

ロードショウ公開が決定しました。

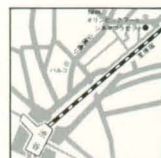
今回は'81年最後のPCB特別企画として、2週間に渡るロングラン公開を実現。

風吹きささむ公園通り、銀色ドームめがけて突ッ走れ!

12/5^土~18^金

シャッフル	12:00	2:40	5:20	8:00
プラスワン	12:45	3:25	6:05	

終了 8:35



シネマ・プラセット

〔渋谷代々木オリンピックプール前〕

料金：前売&電話予約800円 当日1000円

前売券発売所：シネマ・プラセット／文芸坐しねぶていっく／プレ

イガイドラフォーレ／各大学生協プレイガイド／ぴあ他

電話予約：☎(03)295-9003ぴあイベント企画室

主催：ぴあ

協賛：麒麟ビール(株)／日清食品

プラスワンスケジュール

5 ^土 ／6 ^日	闇のカーニバル	山本政志
7 ^月 ／8 ^月	ブランキック公三	碓水 明
9 ^月 ／10 ^月	トランジスタ・ラブ—姦骨墮胎— 東京白菜関K者	緒方 明
11 ^月 ／12 ^月	狂い咲きサンダーロード	石井聰互
13 ^月 ／14 ^月	風たちの午後	矢崎仁司
15 ^月 ／16 ^月	ノット・サティスファイド 怒りの誕生	太田達也 泉谷しげる
17 ^月 ／18 ^月	豚鶏心中	松井良彦



渴きにとどめ。
イエローネームの
麒麟メッツ。



グリーン缶はグレープフルーツ、パープル缶は
グレープ。スポーツ好きの若者にピッタリの、
果汁入り炭酸飲料です。麒麟ビール株式会社



SHUFFLE

シャッフル

鉛は、苦痛のために。
撃鉄は、決意のために。
引金は、決着のために……。
待ってな。もうすぐハジケてやる。

原作：大友克洋
(GORO掲載『RUN』)
脚本&監督：石井聰互
音楽：ヒカシュー
出演：中島陽典
1981年ダイナマイト・プロ作品
16^{mm}・モノクロ・35分

12/5^土~18^金

シネマ・プラセットにてロードショウ公開!!

SHUFFLE

■ストーリー

怒り、そして報復——頭髮を剃り上げ、拳銃に弾丸を込め、部屋を飛び出した小林洋(中島陽典)23才。洋は昨夜、愛人直美(室井滋)を殺害した。何故だ?誰が悪い?直美を麻薬の世界に引きずり込んだ木村への怒りが洋の中で燃え上る。執拗に追い駆けて来る刑事(森達也)を振り切り走り続ける洋の脳裏に、過去の記憶が鮮かに蘇っては通り過ぎていく。

やがて悪夢のような逃走劇は幕を閉じ、連行された洋は、警察署の薄暗い廊下で、23年間の怒りを爆発させた。

■解説

'80年、「狂い咲きサンダーロード」を発表、その異才ぶりを発揮した新鋭石井聰互監督の最新作。石井監督は、'77年「高校大パニック」(8ミリ)でデビュー、それ以来、漸新な映像センスとハワフルな描写力で定評のある気鋭の24歳。現在、新作「爆裂都市／バースト・シティ」を製作中だ。

原作は、今、大学生を中心に人気沸騰の劇画家大友克洋の「RUN」(小学館GORO掲載)。「ショート・ヒース」「さようならニッポン」等、その独特な作風に、熱狂的ファンの支持が集まっている。「初めて『RUN』を読んだ時から、絶対に映画化したいと思った。」と、石井監督が惚れ込んだこの作品「シャッフル」は、16ミリ、モノクロ、35分という小品ながら、強烈なインパクトとハード・ボイルドな感覚にあふれた一篇に仕上がっている。また、音楽はヒカシュー(LP「うわさの人類」等)が担当。画面を見ながらの即興演奏が新鮮だ。

主演は、劇団GAYAの中島陽典。残酷性と幼児性が混在したユニークな個性が光る。共演は、「風の歌を聴け」(大森一樹監督)でも好演の室井滋、他に森達也、武田久美子ら。製作には、第53回ブルーリボンのスタッフ賞を受賞したダイナマイト・プロの若い面々があっている。

原作 大友克洋(小学館GORO掲載「RUN」)
プロデューサー 秋田光彦
脚本・監督 石井聰互
撮影 笠松則通
助監督 緒方 明
監督助手 池田勇二／永井洋一
アシスタント・プロデューサー 大塚恭司
製作担当 千葉貴之
製作進行 山崎 賢
撮影助手 藤井良久
音楽 ヒカシュー
使用曲「ターザ・センチェリーズ・ターン」(LP

「メニン・ブラック」ストラングラーズ／キング)「ウィンター・ヒル」(LP「トゥ・イーチ」サータンレーシオ／サクトリー)

録音 鈴木昭彦／林 成光／内藤盛厚
美術 尾上克郎
メイク 志川あずさ／庄司真由美
製作主任 林崎 巖
弾着 船津 孝／米村弘志
スチール 仁礼敏郎
協力 (株)アミューズ／(株)新赤坂企画
(株)原プランニング

キャスト 中島陽典／森 達也／室井 滋／
王城伸吾／林崎 巖／西嶋憲立／小林 絃／
来住野和也／武田久美子

不発の青春

そういうものが描きたかった

監督石井聰互

“走る”という行為の中に主人公の人生を凝縮させたかった。それに撃ち合いとか殴り合いとかいう派手な仕掛けなしにアクション映画を撮れないものかと思ったんです。今回は、今までと違って“完成度”をめざそうとしました。珍しいことですよ。これまで、完成度なんてことより、如何にはみ出すかということばかり考えていましたから。でも、今度だけはちゃんと作ろうと意識しました。外国へ持っていこうと思っているし、それに自分にもちゃんとした映画が撮れるんだということを示したかったんです。大友さんの劇画は全部好きで、大ファンです。その中でも『RUN』は、なんか人ごととは思えなくてのめり込んでしまったんです。自分の今までの人生を全部表しているような気がして、これはもうやるしかない、やらなきゃ先へ進めないと思いました。そういう強烈なインパクトを感じたんです。大友さんに会うのはうれしいけど、映画が出来たら、一番に見せたいと思います。

「走ることと暴力だけで若者を描きたい」といつも思っています。これだけはハッキリ言いたいですね。



ひたすら走り続ける『RUN』 大友克洋(劇画家)

僕はどっちゃかっていうと“青春”ていう感じのものにしかったんです。『RUN』ていうのはタイトル通り“走る”話です。延々と走る



んです。追っかける刑事と追っかけられる犯人とが、いろいろと昔のことを思い出しながら走る。走るという行為の中で、いろんなことを考えるんだけど、本当に走っていると最後は何にも考えなくなっちゃう。そういう走るといふ行為を描きたかったんだけど、劇画



石井聰互へ

同世代人としてのフルスロットルランナー石井聰互にゴールはない。あの振り続けるパワーは、アン・ラッキー30エイジだからなんだと思いたい。未来に向かって疾走せざる得なくなった「狂い咲き——」のラストで、カメラは死体を捜せないまま空を見る。その目は石井自身のような目だった。今までスクリーンで見たことのない目だった。
榎水 明



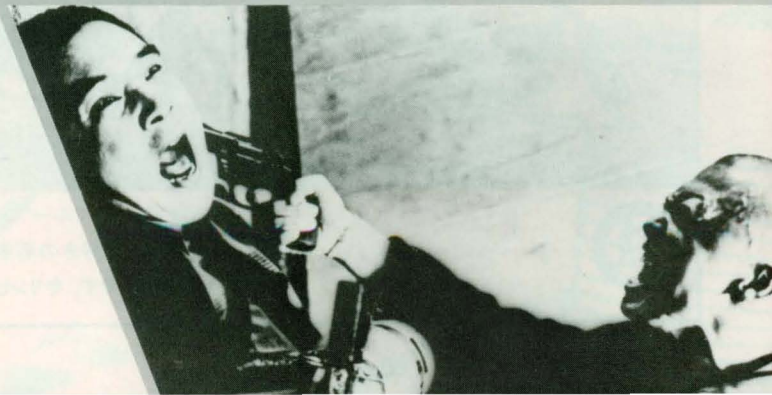
石井ノ愛してる。こんど……。山本政志

いつの日か、バトルロイヤルをめざして、必殺かわすけ毎日練習しております。石井さんも技を用意しておくように。
緒方 明

石井さんていうのは 阿修羅 みたいですね。太田達也

「爆裂都市—バースト・シティ」の成功を期待する。松井良彦

石井は乱暴な天才である。精密な鈍才である。泉谷しげる。



うに僕らも走ってみたわけである。ギターを足で踏みつける。サックスはフリークトーンを連発。石井君は乱暴を要求する。彼の頭の中には既に自分の音楽が鳴っているのだろう。

石井君の映画は、アナーキーとかバイオレンスとかいう言葉でよく語られる。だが、激しいことのみがアナーキーではない。バイオレンスでもない。衝動をいかにフォームに高めるかが重要なのだ。もちろん、彼はそれを知っているだろう。映画が表現になるためには、衝動を構成し、組織する能力が大切だ。でなければ、アナーキーであったり、バイオレンスであることを表現できない。そして音楽において即興とは、最も表現者の資質、能力が問われるべきものである。ごまかしのないエネルギーを組織する。少くとも僕らはそうありたい。それは、石井君の映画に対する考え方と、おのずと似てくるだろう。



初めて一緒に酒飲んだ時、「日本映画をつぶしましょう」と石井が云った。自分のヤロウとしている事に対してすごくマジメな男だと思った。
矢崎 司